

わがまち歴史散歩 街道をあるく（能勢街道編）

『広報いけだ』の平成13年6月号から平成17年1月号で池田を通る街道を紹介する「わがまち歴史散歩 街道をあるく」を連載し、好評を得ました。紹介から20年ほど過ぎ、道や周辺の状況も変化しております。そのため、当時の紹介内容をもとに改めて「街道をあるく（能勢街道編）」を掲載いたします。



第1図 池田市内街道全体図

猪名川の溪口部に位置する池田は、諸街道が集まる交通の要衝として、古くから発展してきました。「能勢街道」「西国街道」「巡礼道」——、池田のまちは街道を往来する大勢の人々で賑わいをみせました。

交通手段が大きく変化した今日、街道はその姿を変え、かつて旅人の安全を願って建てられた道標も、しだいに失われつつあります。しかしながら市内にはなお、昔の面影をとどめる道筋や、三十数基もの道標が残っています。

(1) 物資の運搬と参詣の道

能勢街道は、大阪から池田を経て能勢・亀岡方面に通じる道で、その道筋は時代によって多少異なりますが、明治の中頃は、大阪市街近郊の下三番（現北区中津）から中津川（現新淀川）を渡り、神崎川の三国橋を渡って服部、桜塚、岡町と北上し、刀根山の丘陵を越えて、石橋、池田へと至りました。落語「池田の猪買い」で、大坂から猪の肉を求めて男がやって来た道もこの「能勢街道」です。

能勢街道は、さまざまな物資の運送に利用されるとともに、江戸時代、大坂の庶民の間で盛んに信仰された能勢妙見への参詣道でもありました。

この道が「能勢街道」の名で一般的によばれるようになるのは、実は明治時代以降のことで、それ以前は「大坂道」「池田道」、あるいは多田銀山へ通じる道であったことから「銀山道」などとよばれていました。

(2) 石橋の「辻」(第2・3図)

それでは能勢街道を池田市域の南側から歩いてみましょう。豊中市と池田市の市境、国道

176号線清風荘1丁目交差点を南東から北西方向に通る細い道があります。これが大阪方面からきた能勢街道です(第3図A)。

国道をわたって200mほど北西に進むと、左手側に見えてくる畑の南角に「能勢街道」と刻まれた新しい道標があります。さらに50mほど北に道を進み右手側に見えてくる駐車場の一角にも新しい道標があります。これらは地域と池田市とで平成22年に建てられました。なおも北に進みますと、阪急宝塚線の踏切(第3図B)に至りその近くの駐車場の一角には2基の道標と「石橋村」についての説明板があります(第3図C・D)。この場所は南から来た能勢街道と、京都から西宮へ向かう西国街道とが交わる地点で、法令などを記した高札が掲げられた場所でもありました。道標のうち1基は「西国街道」と刻まれた平成22年の道標で、もう1基は江戸時代の道標です。江戸時代の道標の各面それぞれに「右妙見 すぐ西宮」、「すぐ大坂 京 左いけだ」、「右西宮 左大坂 施主大坂天満」「天保二(1831)卯九月」と刻まれています。「すぐ」というのは、「まっすぐ」という意味です。

行き交う人々は、足を止めてこの道標でそれぞれの行く道を確認したり、高札を読んだりしたことでしょう。今はおもに地元の人々が利用する辻ですが、当時は主要幹線道が交差する重要な場所だったのです。ちなみに池田市域内の西国街



第2図 能勢街道(1)



左の写真に写る細い道が当時の能勢街道です。この先で街道は豊中市域から池田市域へと入ります。この道は国道176号清風荘1丁目交差点から北西に伸びるものです。道を北に進むと阪急宝塚線の踏切に至ります。そこで能勢街道は西国街道と交差します。



その場所は高札を掲げていた所でもあります。現在は道標2基と案内板があります。



踏切を渡り、さらに北へ進みます。すると、商店街が見えてきます。



第3図 能勢街道写真（1）

道沿いにある高札場は、旧北轟木村の順正寺前および、旧北今在家村の受楽寺前にあったようです。なお、能勢街道のうち豊中一石橋間は、明治43年（1910）箕面有馬電気軌道（現阪急宝塚線）の開通に伴い、麻田（蛍池）を経由する道に付け替えられました。

石橋村について（以下、説明板の内容です）江戸時代、このあたり一帯は麻田藩主青木家（一万石）の領地で石橋村と呼ばれました。「石橋」という村名は、この高札場の西側（今の踏み切り下にあたります）に小川があり、そこに石の橋がかけられていたことに因みます。『北豊島村誌』によると、明治40年（1907）ごろまで橋が架かっていたようです。石の橋の大きさは幅3.6m、長さ1.8mの一枚岩で、現在、市立石橋南小学校の校庭に安置されています。

江戸時代の石橋村は、旧石橋村庄屋宅の『宗門御改帳』などによれば、元禄3年（1690）には29軒192人、文久元年（1861）では24軒104人の村民が暮らしていたようです。



第4図 能勢街道（2）

また、旧家の史料によれば、安政元年（1854）、ロシア艦隊が大阪湾、さらに下田沖に来航したとき、幕府より防備を命じられた各藩は農民を動員しましたが、麻田藩主も農民を動員したことが判っています。

麻田藩は明治4年（1871）7月の廃藩置県で麻田県になり、同年11月の府県統合が実施された折、大阪府になりました。石橋村は明治20年（1887）に産所村を編入、明治22年（1889）の市制町村制の施行で大阪府豊島郡の一部となり、行政上、石橋村はなくなりました。

その後、昭和10年（1935）8月に北豊島村、秦野村、細河村、池田町が合併して池田町が成立、さらに昭和14年（1939）4月に池田市となりました。

（3）「赤い橋」を渡り二子塚古墳へ（第4・5図）

さて、能勢街道は踏切を渡ってすぐ右手（北）に折れ、線路と並行して北上し（第3図E）、商店街に入ります（第3図F）。買い物客でにぎわうアーケードを通り抜け、箕面川橋（赤い橋）を渡り（第5図A）、阪急宝塚線の高架をくぐって左手斜めに入る細い道を進むと（第5図B）、国道176号線に出ます。井口堂交差点を横断し、阪急バス石橋営業所の敷地を抜

けてしばらく行くと（第5図C・D）、こんもりとした小山が右手に見えてきます。これが二子塚古墳です。墳丘上にお稲荷さんがまつられていることから稲荷山古墳とも呼ばれています。墳丘長45mの前方後円墳で築造時期は6世紀半ばごろ、猪名川流域最後の前方後円墳と考えています。後円部（南側）および、前方部（北側）に横穴式石室をもち、南側の石室は南東方向に開口し、内部を覗くことができます。一方で、北側の石室は土砂により埋没しており、一部の天井石が露出しているのを確認できるのみとなっています（第5図E・F）。

（4）井口堂「新家」の道標（第4・5図）

稲荷山古墳から100mほど北へ進むとT字路にでます（第5図G）。有馬道と能勢街道とが出会う場所です。このあたりは街道に沿って早くから集落ができていたと思われ、「新家」とよばれていました。ここに2基の道標があります（第5図H）。一つは浮き彫りの仏像の下に「右大坂」と太く深く刻まれています。もう一つはその左側にある自然石を利用したもので、「右ハ大坂道 南無阿弥陀仏 左ハ京道」の文字と蓮華文が刻まれています。池田方面から来た場合、この地点から右手の道（能勢街道）を進むと大阪へ、「左ハ京道」に進むと箕面市瀬川で西国街道に合流し、京都へ行くことができました。

（5）「ニシンジョ」の道標（第6・8図）

能勢街道は稲荷山古墳の北、井口堂1丁目のT字路で有馬道と合流して西に進みます。このあたりは、旧街道のたたずまいが比較的良好に残っている所です。

150mほど進むと、地蔵を祀る小さな祠に行き当たります（第8図A）。このあたりは井口堂の新家「ニシンジョ」といい、この地蔵を地元では「ニシンジョの地蔵さん」と呼んでいるそうです。また、ほこらに寄り添うように1基の道標が建っています（第8図B）。



アーケードを抜けると赤い橋が見えます（左写真、西から〈大阪方面が写る〉）。橋を渡り北東方向（右）に道を曲がり少し進むと、右の写真に写る場所に出ます。左斜めに入る細い道が能勢街道です。



さらに進み、国道171号線の高架の下をくぐり右手にある阪急バス石橋営業所の横を通ります。



北へしばらく行くと、右手に二子塚古墳が見えてきます。
右の写真は後円部（南側）にある横穴式石室です。



つきあたりを左に曲がる道が能勢街道です。ここで有馬道と合流します。
このT字路の角に道標が2基あります（右写真）。写真に写る石造物の右2つが道標です。

第5図 能勢街道写真（2）



第6図 能勢街道（3）



第7図 能勢街道（4）

自然石を利用したもので、「右ハいけだみち 南無阿弥陀佛 左ハありまみち」の文字と蓮華文が刻まれており、ここで能勢街道は右（北）に折れ、有馬道は左（西）に進むことを示しています。

（6）行基伝承の二尾池（第6・8図）

有馬道と分かれた能勢街道は、100 mほど北進して左手（西）に折れ、東畑住吉線を横断します（第8図C）。そこで鉢塚3丁目へ入り、しばらく行くと水月公園の前に出ます。水月公園は梅林や花菖蒲園など四季折々の彩り豊かな公園で、友好都市の中国蘇州市から贈られたあずまや「斉芳亭」などもあり、市民の憩いの場となっています（第8図D）。

この付近一帯には、かつて、新池・舟池・二尾池・葉阪池という4つの池がありました。このうち舟池と二尾池の一部が、現在、公園内に残っています。二尾池は4つの池の中で最も大きく、地元には、奈良時代の僧行基によって築かれたとする言い伝えが残っています。昔はお盆の時に、この池の土手で供え物をハスの葉に乗せ、送り火をたいてソンジョサン（先祖）を送ったといいます。なお、水月公園の入り口には「歴史の道 能勢街道」のモニュメントが、道を挟んだ向かい側には「能勢街道」と彫られた石柱が建っています。

（7）尊鉢の厄神さん（第6～8図）

水月公園の前を過ぎると、道はなだらかな下り坂になります。途中、右手に、付近にあった石仏や宝篋印塔などを集めて祀っている一角があります（第8図E）。そして、この坂を下ると右手が釈迦院です（第8図F～H）。釈迦院は真言宗の寺院で、「尊鉢の厄神さん」の名で親しまれ、1月18・19日の厄神大祭には大勢の参拝者がでにぎわいます。境内の庭が美しく、鎌倉時代の年号がある宝篋印塔（国重要美術品）や、江戸時代－寛永9年（1632）の銘のある梵鐘（市重要文化財）などがあります。「尊鉢」の名は、行基が「仏在世の鉄鉢」を岩窟から掘り起こしたという伝承に由来しています。この岩窟は後に述べます「鉢塚古墳」を指します。

釈迦院の宝篋印塔・梵鐘 宝篋印塔は昔、中国でお経を入れて全国にわたった小塔に由来し、日本では鎌倉時代中期ごろから模作されたようです。塔は下から基礎・塔身・笠・相輪の4つの部位で1つの塔となりますが、釈迦院のものは相輪が欠失しています。釈迦院の宝篋印塔には「正安元年十二月廿五日願主藤原景正」の銘があることから正安元年（1299）に藤原景正が建てたことがわかる資料となっています。この藤原景正は池田市域を拠点としていた池田氏につながる人物であると考えられています。上で述べた釈迦院の梵鐘は「寛永九壬申年一月十二日」の銘から寛永9年に造られたことがわかるものです。江戸時代初期のものですが、桃山時代の特徴を伝えるものとなっています。寺の鐘は時刻や災害の発生を知らせる重要な役割を持っていました。



ニシンジョの地蔵さんと道標。ここで、能勢街道と有馬道が分岐します。
能勢街道は写真の右手へ、有馬道は写真の奥側へと続きます。



さらに道なりに進むと、東畑住吉線が見えてきます。これを横断し写真に写る細い道（左写真）に入り西に進みます。すると、右手に公園が見えてきます。これが水月公園です（右写真）。右の写真の右後ろに「歴史の道 能勢街道」のモニュメントがあります。



水月公園を過ぎ、なだらかな下り坂を北西に進むと多くの石仏などが祀ってある一角が右手に見えます（左写真）。さらに進むと右手に釈迦院（尊鉢厄神）が見えてきます（右写真、北西から〈大阪方面が写る〉）。



左の写真が釈迦院（尊鉢厄神）入口です。釈迦院の前を過ると変則的な十字路に行き着きます（右写真）。そして、右の写真の奥へと続く道が能勢街道です。

第8図 能勢街道写真（3）

(8) 周辺の文化財（第6・7・9図）

ここで少し、付近の文化財について紹介していきたいと思います。

青面金剛（第9図A） まず、紹介するのは釈迦院東側の急な坂道を80 mほど上った右手にある小さなほくらです。この中に「青面金剛」と刻んだ石碑があります。青面金剛とは夜叉（やしゃ）神の一つで、青色の身、四つ（あるいは六つ）の手、三つの目をもち、病魔を払いのける強い力をもつとされています。石に姿を刻む場合もありますが、このように文字を刻む場合もあります。この場所が旧才田村の鬼門に当たることから建てられたのでしょう。

鉢塚古墳（第9図B） 能勢街道を南へ100 mほど下った場所にある五社神社境内に、大阪府の史跡に指定されている鉢塚古墳があります。鉢塚古墳は墳丘径45 mで周溝をもつ円墳です。6世紀の終わりごろに造られ、奈良県明日香村の石舞台古墳に匹敵する巨大な横穴式石室をもつことで知られています。特に、高さ5.2 mの石室は大阪府内では一番、全国でも5本の指に入る規模を誇ります。また、石室内部には国の重要文化財に指定されている石造十三重塔があります。室町時代前期のものとして推定されており、塔の左右には、これと同時期とみられる板碑と石仏があります。さらに、墳丘頂部では経塚が見つかっています。経塚とは経典を土中に埋納した施設で、多くは霊地・聖地とされる場所にあり、弥勒が現世に出現するまで経典を保存しようとして始まりました。鉢塚古墳墳丘上の経塚からは、経巻は失っていましたが鉄製の経筒などが出土し、それらは市の重要文化財となっています。

秦野村役場の道標（第9図C・D） 五社神社から少し南の小道には、「右秦野村役場へ」「左池田町へ近道本道改修石田小兵衛」「昭和七年十月廿六日」と刻まれた道標があります。秦野村は明治22年（1889）、畑村・上渋谷村・下渋谷村・尊鉢村・才田村の五つの村が合併してできた村で、現在の秦野小学校の近くに役場がありました。秦野村は昭和10年（1935）



左の写真は青面金剛、右の写真は五社神社です。社殿の奥に見える林が鉢塚古墳で、横穴式石室へは社殿の右側から行くことができますが、玄室（石室奥）には崩落の可能性があるため立ち入ることはできません。



五社神社から南へ向かう小道を歩いて行くと道の東側に道標があります。右の写真はそれを拡大したもので、池田町方向が示された面が写っています。

第9図 周辺文化財写真

に池田町と合併し、池田町は昭和 14 年（1939）の市制施行で池田市になりました。

（9）池田村の東の入り口「辻ケ池」（第 7・10・11 図）

さて、再び能勢街道に戻ることにしましょう。能勢街道は西畑莊園線との交差点（第 11 図 A）を過ぎ、大阪教育大学附属池田小・中・高等学校校門前を通ってさらに北西へ進みます（第 11 図 B）。独立行政法人産業技術総合研究所関西センター（旧大阪工業技術研究所）を右手に、荒堀川・八王寺川の二つの小さな川を越え、さらに進んで辻ケ池公園に行き当たります（第 11 図 C）。大阪方面から来た場合、ここが旧池田村の東の入口となります。公園は「辻ケ池」、別名「あわんど池」という池を埋め立ててできたものです（第 11 図 D）。池は記録によると、慶長 16 年（1611）に造られたとあり、昔、この池のほとりに大きな松の木があって、いつのころからか白いへビがすみつき、「池の守り神」として大切にされていたという話が伝えられています。

（10）阿波堂^{あわんどう}（第 10・11 図）

能勢街道は、辻ケ池公園（現上池田 2 丁目）の北側を西に進み、上池田 1 丁目の住宅街へと入ります（第 11 図 E・F）。このあたりからが旧池田村の町並みになりますが、近年、住宅の建て替えが進んだこともあり、景観は急速に変わりつつあります。

100 m ほど行くと左手に「上池田薬師堂」があります（第 11 図 G）。このお堂は、池田城主の後室の冥福を祈るために建てられた極楽寺が移されたとの言い伝えがあります。この池田城主の後室は阿波三好氏の娘であったことから別名「阿波堂」とも呼ばれています。堂内には高さはほぼ等身大の 145cm、穏やかな表情をもつ薬師如来立像（市指定重要文化財）が安置されており、市内に残された仏像のなかでも特に優れたものといわれています。今から 1000 年ほど前の 10 世紀後半（平安時代後期）の作と推定されています。また、お堂の向かい側には石仏や五輪塔を集めて祀っている一角があります（第 11 図 H）。中には石仏としては市内最古の天文 16 年（1547）の年号が刻まれたものもあります。

（11）織姫伝承の星の宮（第 10・12 図）

お堂からさらに 100 m ほど行くと建石町に入ります。建石町に入っすぐ左手にあるお社が星の宮（明星大神宮）です（第 12 図 A）。ここは「クレハトリ・アヤハトリ伝承」ゆかりの地の一つで、二人の織姫が夜遅くまで機を織っていると、天から 7 つの星が降りてきて真昼のように明るく織り殿を照らし、仕事がいそうはかどったという伝承が残されています。

また、星の宮は毎年 8 月 24 日に行われる建石町のがんがら火（府指定無形民俗文化財）の舞台でもあります。五月山の大明ヶ原で大文字に灯される火はここで起こされます。そしてその火が子どもたちの小松明に移され、再び星の宮に戻って終了します。

クレハトリ・アヤハトリ伝承 機織り技術の伝来に関するもので、もともなった題材は『日本書紀』に収録されております。この話にまつわる伝承地は星の宮の他に、二人が中国の呉から来て上陸した「唐船が淵（市史跡）」、水をくみ上げ糸を染めた「染殿井」、二人を葬った「梅室・姫室」など池田市域には数多く存在します。この伝承は池田に限ったものではなく、兵庫県西宮市などでも同様の伝承が残っています。

梅室・姫室 阪急電鉄池田駅周辺にあったとされる経塚です。当初は伝承の影響を受け、古墳



第 10 図 能勢街道（5）



道なりに歩くと西畑荘園線との交差点が見えてきます。この交差点を直進し、さらに道なりに進む道が能勢街道です。



この道をつきあたりまで進み、そこを右に曲がります。この道のつきあたりが辻ヶ池公園（右写真）です。



公園を左手に歩いて行くと五叉路の交差点がありますので、横断歩道を渡り左に曲がります（左写真）。
道が大きくカーブする所で右斜めに分岐する道があります（右写真）。これが能勢街道です。



道を北西に進むと十字路があり、その南東の角（西に向かって左手）に上池田薬師堂があります（左写真）。
その向かいには石仏や五輪塔を集めて祀っている一角があります（右写真）。

第 11 図 能勢街道写真（4）



道なりに進むと左手に星の宮が見えてきます（左写真、北西から）。
右の写真は鳥居の横にある道標を拡大したものです。



星の宮の右側には道が北へ分岐する場所があります（左写真）。この北へ分岐する道が本来の能勢街道です。ここが城域であったことが関係して街道が折れ曲がっているのがよくわかります。また、星の宮の南側には池田城の堀跡が今でも確認できます（右写真）。現在は道路になっておりますが、堀の名残で昔は水路となっており、能勢街道と堀が交差する所には橋が架かっていました。その一部が現在でも残されています（左写真、○部）。

第 12 図 能勢街道写真（5）

と考えられていました。明治 42 年（1909）、箕面有馬電気軌道の敷設工事により破壊され、その際行われた発掘調査で、梅室から和鏡 3 面と「素焼き」の埴・皿の破片が出土したようです。姫室も調査が行われましたが、めぼしいものは出土しなかったとされています。

(12) 鉤^{かぎ}の手の道（第 10・12 図）

星の宮の鳥居のそばには 1 基の道標があります（第 12 図 B）。自然石を利用し、「左京大坂道」と深く刻まれています。ところで、元禄 10 年（1697）や安政 4 年（1857）の「池田村絵図」によると、上池田町から建石町にかけての能勢街道には、何カ所かで道が鉤の手のように曲がっていることが確認できます。これはこのあたりが中世池田城の城域であり、意図的に道を曲げることによって城の防御機能を高めようとしたためと考えられています。星の宮前の道の北側（第 12 図 C）には、この折れ曲がった道が現在も残っており、その名残を伺うことができます。現在のまっすぐな道は後につけられたもので、その際にこの道標も今の位置に移されたのでしょう。

池田城跡 池田城は猪名川東岸の段丘に立地し、城郭の中心部である主郭を段丘北西隅に配置することで北側・西側・南側の段丘崖を防御ラインに取り込み、守りを固めています。また、地続きとなっている東側^{くるわ}に関しては、郭を南東方向に造成することで防御ラインを設定し、守りを固める構造となっています。以上の構造をもつ池田城は 15 世紀ごろ、元々池田の地に住んでいた一族である池田氏により築かれたと考えられており、荒木村重が有岡城に支配拠点を移したことで、その機能を失ってしまいました。



第13図 能勢街道（6）

能勢街道沿いでは「鉤（かぎ）の手の道」の他にも、中世池田城の名残がいくつか見られます。その一つは堀の跡で、現在、星の宮の東側から南に伸びる道路がそれにあたり、当時の堀の様子的一端をうかがうことができます（第12図D）。

堀はちょうど鉤の手に道が折れる、上池田と建石町の境で能勢街道とぶつかります。そこにはかつて、水路（堀の名残と思われます）が流れており、その水路に架けられていた橋の石柱

の一部が、アスファルトの道に半ば埋もれるようにして今も残っています（第12図C）。

堀はさらに北へと延び、市立池田中学校の西側の一段低くなった細い道にその名残をとどめています。星の宮の東南から続くこの堀は、池田城域の最も東端に位置し、地続きとなっている東側からの攻撃に備え、段丘を南北に切る役割を果たしていました。

九頭龍神社（第10図） 池田中学校の西門横の石段を上った木立の中に、小さな祠があります。ここには次のような話が伝えられています。「むかし、この付近には大蛇がいて多くの人々をなやまし、民家は戸を閉め、ここを通る人がだんだん少なくなってゆきました。そこで、源満仲が白羽の矢を射ってこれを射止めました。その時、山鳴りがして動き、土地が崩れ落ち、頭が九つの龍が死んでいました。そこでその土地に穴を掘って埋め、祠を建ててお祭をするようになりました」（『池田・昔ばなし』から）この話の中に出てくる祠が現在、九頭龍神社と呼ばれています。

（13）「めんも坂」と「牛追い坂」（第13・14図）

再び能勢街道に戻ることしましょう。上池田で旧池田村の集落の中に入った能勢街道は、建石町の星の宮前を通って西へと進みます。200 mほど行くと、左手に法園寺、右手に阪急学園池田文庫があります（第14図A）。

この辺りから道は急な下り坂になります。この坂は「めんも坂」と呼ばれ、かつてこの近くにあった旅館・料理屋「めん茂楼」がその名の由来ともいわれています（第14図B）。江戸時代の絵図などから、かつては階段状になっていたことが知られており、荷車を牛に引かせた人々が大阪方面へ向かう場合、いったん、この坂の手前で右手（南）に迂回し、法園寺西側の坂を上ったそうです。そのため、法園寺西側の坂を「牛追い坂」と呼んでいました（第14図C・D）。

明治43年（1910）に箕面有馬電気軌道（現阪急宝塚線）が開通する以前は、池田から大阪へ商いに行くには、夜中のうちからこの坂を越えて能勢街道を行かねばならなかったそうです。

（14）かつての中心街本町通り（第13～15図）

能勢街道は「めんも坂」から西へ進み、本町通りに入ります（第14図E）。この辺りはかつて、池田町役場や警察署、郵便局、銀行などが建ち並ぶ池田の中心街でした。

酒蔵が軒を連ねる 江戸時代、全国にその名を馳せた「池田酒」の造り酒屋の酒蔵が軒を連ねていたのもこの辺りです。現在、ハローワーク（職業安定所）東側からコミュニティセン



西に進むと道は下り坂になります。ここはかつて「めんも坂」と言われ、当初は階段状になっていました（左写真：東から、右写真：西から）。



道が下り坂になる手前辺りで南に分岐する道があります。ここは階段状の「めんも坂」を迂回するための道で「牛追い坂」と呼ばれていました。左写真の左側に写る寺院は法園寺です。



坂を下りきった道は本町通りに入ります（左写真）。そのまま道なりに進むと栄町商店街から五月山に向かう道と交差します。この交差点が「井戸の辻」です（右写真）。道路の補修箇所（アスファルトの色が異なる）の下で井戸が発見されました。



そのまま西へ道を進むと右手に見える洋風建築が旧加島銀行池田支店です（左写真）。また、「井戸の辻」から北に道を進むと左手に見える建物が稲東家住宅です（右写真、第13図参照）。

第14図 能勢街道写真（6）



旧加島銀行池田支店の道を挟んだ向かいにはポケットパークがあります。奥にあるのが移築した「井戸の辻」の井戸の蓋石で、手前が池田のピリケンさんです（左写真）。右の写真は落語みゆーじあむで、旧加島銀行池田支店の西側にあります。



ポケットパーク・落語みゆーじあむを過ぎ、道なりに進むと左手に池田呉服座が見えてきます（左写真）。そして、呉服座が南東の角にあたる十字路を北に進む道が能勢街道です（右写真）。



路地に入り正面に見えるのが西光寺です。この辺りは当時の景観が少し残っています（左写真）。右の写真は吉田酒造の建物で西光寺の東側にあります（右写真）。



西光寺を前を西（左）に行く道が能勢街道です。そのまま173号線に出たか、再び北（右）に曲がったと思われます（左写真）。右の写真は西光寺の西角にある道標です。

第16図 能勢街道写真（7）

す（第 16 図 G・H）。「右能勢街道 地黄 亀岡」「左篠山街道 篠山 伊丹」と刻まれ、能勢街道と篠山街道の分岐点であることを示しています。ただし、道標の文字面の向きから、現在のように道の東の角ではなく西の角に建てられていたとも考えられますし、また、別の場所から移設された可能性もあります。

池田のビリケンさん（第 16 図 A） ビリケンさんは明治 41 年（1908）にアメリカの女流芸術家が夢に現れた奇妙な神様の姿を彫刻したものです。これが当時大流行し、田村駒（株）が商標登録に用いました。現在は幸運をもたらす神様として親しまれています。そんなビリケンさんがなぜ池田市にあるのでしょうか。その理由は田村駒（株）創業者の田村駒治郎が池田村出身であったことから、市制 70 周年記念事業の一環で「福のまち池田」のニューシンボルとしてビリケンさんを用いることを快諾していただいたからです。同社が許可したもののとしては通天閣のビリケンさん以外では初の複製となります。

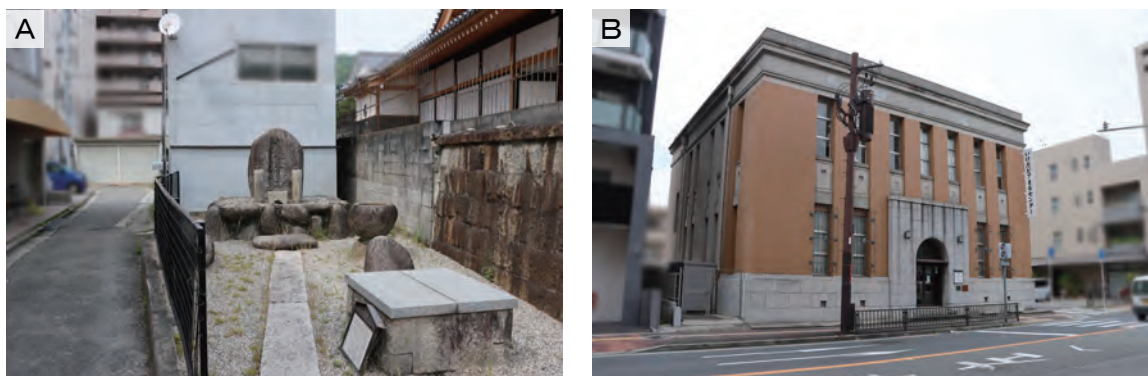
落語みゅーじあむ（第 16 図 B） 古くから交通の要衝として発展した池田市は「池田の猪買い」「池田の牛ほめ」など古典落語の舞台になっております。そのため、平成 19 年に開業当初の池田銀行本店をリニューアルし、「落語みゅーじあむ」を開館しました。1 階には展示室兼舞台があり、上方落語の歴史や池田と落語の関わりなどを展示しています。舞台では、生の落語会を味わうことができます。2 階には 1100 点以上の落語に関する資料を収蔵し、視聴コーナーでは CD や DVD で落語を聴くことができます。

池田呉服座（第 16 図 C） 昭和 44 年に廃業となった芝居小屋が復活したものです。本体は呉服橋の南側、猪名川沿いにあったもので、明治の娯楽の中心として人々に愛されていました。映画や芝居だけでなく書画・植木の展覧会など様々な目的で集う場でもありました。廃業になったのち、愛知県犬山市にある「明治村」に移築され、昭和 59 年には江戸時代の劇場形式を残していることから国の重要文化財に指定されました。

吉田酒造（第 16 図 F） 西光寺東側には銘酒「緑一」を醸造する吉田酒造（株）が存在し、主屋・屋敷蔵などが登録有形文化財になっています。本来は、屋敷蔵の北側にも建物が並んでいたようですが、平成 7 年の阪神・淡路大震災で倒壊してしまいました。現存する主屋などは明治 11 年（1878）の再建で、近代初頭の酒造屋と近世以来の銘醸地池田の繁栄を今日に伝えております。

（16）猪名川東岸を北上する（第 15・17・19 図）

能勢街道はこのまま西へ進んで国道 173 号に出るか、あるいは、ここで再び右（北）に折れ、50 m ほど進んだのち左に折れ、国道へ出たものと思われます（第 16 図 G）。こちらの道には途中に妙見堂の建物があった（第 17 図 A）ことから、能勢妙見参けいの人々は、後者の道



北に道を曲がると右手には妙見堂の建物がありました。現在は左の写真のようになっています。国道 173 号線に合流してすぐ、北に向かって左側にあるのが旧池田実業銀行本店です。

第 17 図 能勢街道写真（8）

を通ったのかもしれませんが。こののち、能勢街道は国道 173 号沿いを北上したものと思われ
ますが、道路拡幅工事などで、残念ながら昔の面影はほとんどとどめていません。新町交差
点から北へ 500 m ほど進むと右手に祠（地蔵堂）があり、その前に 3 基の道標があります（第
19 図 A）。いずれの道標も右の道を行くと久安寺（池田市伏尾町）、左の道を行くと多田（川
西市）から能勢妙見へ至ることを示しています。この地点は旧池田村と旧木部村との境界に
あたり、能勢街道はここから旧木部村へ入ることになります。

旧池田実業銀行本店（第 17 図 B） 173 号の新町交差点の西側角にある古風な鉄筋コンクリ
ート 2 階建ての建物をご存じでしょうか。この建物は 大正 14 年（1925）、池田実業銀行本店と
して建築されたもの（登録有形文化財）で、池田で最初の鉄筋コンクリート建築です。その
後住友銀行、図書館、教育研究所を経て、現在は「いけだピアまるセンター」の名称でベン
チャー企業育成の場として活用されています。重厚で風格のあるこの建物は、本町通りの旧
加島銀行池田支店（木造モルタル 2 階建）とともに、池田を代表する近代建築の一つに数え
られています。

（17）古江橋の道標（第 18・19 図）

木部町に入った能勢街道は、近年の阪神高速道路池田線の工事によって一部失われてし
まった箇所もありますが、国道 173 号西側、猪名川寄りの道を北上します（第 19 図 B）。し
ばらく行くとふたたび国道と合流し、すぐに猪名川の支流、余野川（久安寺川）に架かる古
江橋を渡ります。

橋を渡ったところに右斜め（北東）に進む道があり、その手前に 2 基の道標があります（第
19 図 C）。1 基は人の背丈ほどの高さがあり、「南無妙法蓮華經」の文字の下に「右妙見山
左多田院并ゆもと」と刻まれています。江戸時代中ごろ、安永 3 年（1774）に建てられたも
のです。

もう 1 基は上部が三角形になっていて、北西側の面に「左妙見道」の文字が刻まれ、また、
方向を示す指絵の浮き彫りが施されています。先の道標より 100 年以上後の明治 24 年（1891）
に建てられました。

この道標が示すように、右斜め（北東）に進
む道は「妙見道」と呼ばれ、能勢妙見へはこち
らの道を行くのが一般的だったようです。なお、
ここにはかつて、自然石に地蔵尊を刻んだ道標
がありましたが、現在は吉田町の慈恩寺に移設
されています。

（18）村人たちによる街道の改修（第 18・19 図）

能勢街道は国道 173 号をそのまま北西に進み、
しばらく行くと Y 字路があります（第 19 図 D）。
ここで能勢街道は国道を離れ、右側の道に入
ります。ほどなく右手に大きな石灯ろうが見えて
きます（第 19 図 E）。その側に「能勢街道」「札
場橋」「明治三十九年十月架之」と刻まれた小
さな道標があります（第 19 図 F）。昔この付
近には札場（法令などを掲げる場所）があり、
また、この一角を流れる水路に札場橋とよばれる橋が
架けられていました。

能勢街道はこのまま古江の集落へ入り、少し



第 18 図 能勢街道（8）



国道 173 号線を北へ歩き続けると山側（東側）に左の写真のような道標などがあります。さらに道なりに進むと右の写真の Y 字路が見えてきます。ここで北西に分岐する道が能勢街道です。この交差点付近の歩道は少々複雑なので要注意です。



北西に道を進むと余野川に架かる古江橋があります。これを渡った所に2基の道標があります（左写真）。この道標がある場所で、能勢街道と妙見道（北、右側）が分かります。さらに道なりに進むと右の写真に写る Y 字路が見えてきます。ここを右に曲がる道が能勢街道です。



道なりに進むと再び Y 字路があり右手に石灯籠が見えてきます。この近くに2基の道標があります。昔この場所には水路に架かる橋がありました。この Y 字路の北に（左）に向かう道が能勢街道です。



北へ進むと道が北と西に分かれる場所があります。この両方が能勢街道です。北に向かう道は横山峠を越える道で西に向かう道が峠を迂回する道となっています。峠を越える道は遠くから見ることができます（右写真）。

第 19 図 能勢街道写真（9）

行ったところで左（西）に折れます（第 19 図 G）。しかし、江戸時代にはここで折れずに北上して山に入り、横山峠という峠を越えて東多田へ出ていました（第 19 図 H）。この峠はかなりの難所だったらしく、幕末の嘉永年間（1848 ～ 1854）、木部村と新田村（現川西市）の人が、山越えを避けて猪名川沿いにある細道の改修を行いたいと願い出ました。工事は岩を削る大変な作業でしたが、やがて道幅が広げられ、荷物を担いだ人々や牛、馬が楽に通れるようになり、能勢と大阪を結ぶ交通がとても便利になったそうです。

ここから先、能勢街道は池田市に別れを告げ、兵庫県川西市へ入っていきます。